

京都における医史学研究史〔Ⅱ〕

杉立義一

昭和十九年末をもって、全国的に組織的な医史学研究は休止状態となった。戦後、研究が再開されて、雑誌が復刊されるまでには数年を要した。京都に於ても同様であったが、昭和五十年を境にして、京都府医師会を中心にして医史学研究は活発となった。

四、昭和二十年～四十九年（一九四五～七四）

1、昭和二十二年（一九四七）五月十一日

杏林温故会、例会再開

杏林温故会は戦後第一回例会を中野操、三木栄らが中心となって、大阪市で開き、京都からは佐伯理一郎、藪内清、阿知波五郎らが参加した。同会は昭和二十四年一月、日本医史学会関西支部と改称した。昭和二十七年末までの五年間に京都市で九回の例会が開かれた。

2、種痘伝来百年記念行事

昭和二十四年は京都種痘伝来百周年に当るのを記念して、京都府医師会は日野鼎哉の百年忌法要を行い、西大谷の鼎哉の墓碑を改修するとともに、墓前にあった創始五十年記念碑を、医師会館敷地内に移した。この碑は医師会館の移転によ

り現会館前庭にある。

(一)昭和二十四年十一月一日

種痘伝来耄百年記念資料展覧会

京都府医師会館において種痘関連資料一〇八点を展示した。

(二)昭和二十四年十二月一日

種痘伝来耄百年講演会

京都府医師会館にて、次の三講演を行った。

種痘と民俗

田中緑紅

種痘雑話

土屋忠良

京都を中心とした種痘伝来史

中野操

3、昭和二十七年（一九五二）十二月

『医譚』復刊第一号発行

日本医史学会関西支部の機関誌『医譚』は、昭和十九年六月第一七号をもって休刊となっていたが、昭和二十七年になり漸く復刊された。昭和三十年前後には、京都からは阿知波五郎、宗田一、山本四郎らの論文が目立つ。

4、昭和二十八年（一九五三）七月五日

関西支部第五一回例会

佐伯理一郎が五月三十日、九十二歳をもって死去したので、会員十数名が佐伯邸寿安堂に集って追悼会を催した。

5、昭和二十九年（一九五四）二月

清涼寺釈迦如来立像胎内五臓研究

立像胎内から多くの奉籠品が発見されて以来、各専門領域の研究者を集めて総合研究が行われた。特に絹製内臓模型を研究するため医学班を設け、日本医史学会より森田幸門、渡辺幸三、石原明が調査研究を行った。

6、昭和二十九年（一九五四）三月一日

『日本医史学雑誌』復刊

日本医史学会は昭和二十八年九月から、東京で毎月例会をひらいてきたが、昭和二十九年になり『日本医史学雑誌』復刊第一号（第五卷第一号、通巻第一三三五号）を発行した。京都からは評議員として阿知波五郎、川井銀之助、藪内清が参加し、昭和三十年から阿知波五郎は理事に就任した。

7、昭和三十年（一九五五）四月三・四日

第五七回日本医史学会総会

会場 京都女子大学講堂

第一四回日本医史学会総会が、四月一―五日、京都市で開催されたのに伴って、その第一分科会である本会総会も京都市で開催された。

会長、内山孝一

シンポジウム

医学教育の歴史、講演一三題

特別講演

わが国における医学教育の歴史

緒方富雄

朝鮮医育史（新羅Ⅱ高麗Ⅱ李朝）

三木 栄

一般演題 一二二題

8、昭和三十年（一九五五）三月二十九日～四月十日

医学に関する美術資料展

会場 京都国立博物館

第一四回日本医学会総会古美術展部（部長、三浦百重）は、京都国立博物館と共催して、医史学的に貴重でありかつ美術的評価も高い、国宝、重文をふくむ一六三点の資料（絵巻物、和漢典籍、解剖図、蘭学資料、器具等）を集めて展覧会を催した。このうち八〇点を撰んで、『医学に関する古美術聚英』として昭和三十年九月に編集刊行した。

9、昭和三十年（一九五五）八月一日

『京都府立医科大学八十年史』刊行

昭和二十七年十一月一日、創立八十周年を迎え記念事業の一として、八十年史を編纂（委員長 川井銀之助）し刊行した。このうち序説（横田穰）、療病院時代（川井銀之助・中野操）の記述は、京都現代医学の黎明期の歴史そのものである。

10、昭和三十三年（一九五七）十月二十日

藤林普山百二十年祭

普山の出生地である京都府綴喜郡田辺町では、普山先生景仰会を組織して、普賢寺小学校において記念式典を行い、中野操の記念講演があった。記念誌には山本四郎が「藤林普山先生伝」を執筆した。

11、昭和三十三年（一九五八）十一月九日

小石元俊百五十年忌記念会

会場 京都府医師会館

京都府医師会と日本医史学会関西支部が共催して小石元俊百五十年忌記念会を行った。

記念講演

京都で育成された小石蘭学

羽倉敬尚

小石元俊先生の医学上の功績について

中野操

小石元俊先生を憶う

新村出

なお別室で小石家関係資料二十数点を陳列して展示会がひらかれた。

12、昭和三十六年（一九六二）十一月十一・十二日

第六二回日本医史学会総会

会場 京都府立植物園会館講堂

会長、岡西為人

特別講演 日本眼鏡史の研究

福島義一

一般講演 一三題

13、昭和三十七年（一九六二）五月十三日

蘭学資料研究会第四回大会

会場 京都大学附属図書館

特別講演 蘭学事始についてわかってきたこと

緒方富雄

研究発表 一一題

上方蘭学者展五月十二―十四日、京大図書館展観室において。資料八七点展示。

なおこの時同会関西支部（支部長 藪内 清）が発会した。

14、昭和三十七年（一九六二）五月二十七日

山脇東洋二百年忌記念会

会場 京都府医師会館

日本医史学会、日本解剖学会近畿地方部会、京都府医師会が主催団体となって、山脇東洋の業績を称えて、次のように記念事業を行った。

記念講演

山脇東洋と栗山孝庵

田中助一

わが国人体解剖発祥の地を求めて

西村秀雄

蔵志の内容とその文化的意義

小川鼎三

二〇〇年忌にあたり山脇東洋を憶う

W・O・ラインハルト

史料展観、同日、関係史料三八点を展示した。

西村秀雄（京大解剖学教授）は、山脇東洋の、解剖場所を確認し（京都感化保護院）、記念碑の建立を提唱した。

15、昭和三十七年（一九六二）十月二十日

新宮涼庭顕彰碑建立

宮津市由良在任の郷土史家矢田悟郎は、私財を投じて涼庭の顕彰碑を由良神社境内に建てた。題字は武見太郎の書になる。なお大正三年、新宮涼男が建てた涼庭の銅像は、書院跡を買取った上田堪一郎より舞鶴市に寄贈され、いま舞鶴メヂカルセンター内にある。

16、昭和三十八年（一九六三）三月二十一日

水原三折百年忌法要及三折資料展

三折の菩提寺である正行院（京都市下京区東洞院通塩小路下ル）の住職須賀隆賢は、法要を行うとともに、肖像、家系図、著書版木等を展示した。

17、昭和三十八年（一九六三）八月四日

中神琴溪百三十年祭

日本医史学会関西支部、東洋医学会関西支部、井出町郷土史会が共催して、綴喜都井出町田村新田の琴溪の墓前で、法要を行い、ついで記念講演を行った。

琴溪雑感

西岡一夫

琴溪と喜多村良宅の医術

山田光胤

私の見た琴溪翁

中神良太

後日、中神良太は記念誌を発行した。

18、昭和四十二年（一九六七）十一月三日

『京都大学七十年史』刊行

京都大学は明治三十年の創立以来の七十年史を編集して刊行した。

19、昭和四十三年（一九六八）九月

『京都府医師会三十年史』発行

戦時中にあった医師会は解散して、社団法人京都府医師会が、正式に誕生したのは、昭和二十二年十一月一日であった。その設立二十周年を記念して、京都府医師会は二十年史を編纂発行した。

その冒頭に、前史として、平安初期から終戦までの略史を阿知波五郎が執筆した。

20、昭和四十六年（一九七二）三月二十日

『京都府医師会設立二十周年記念年表』発行

明治元年より昭和十九年までの年表を、阿知波五郎が編集し、府医師会が発行した。

21、昭和四十八年（一九七三）十月

太田典礼と医史学研究

京都府出身の太田典礼は、東京都内に古医学資料センターを設立し、『古医学月報』を創刊した。これは三カ年（第三十九号）つづいた後、昭和五十二年一月より「科学医学資料研究」と改題された。なお太田はこの前後、京都府医師会の医学研究活動に、側面からではあるが、貢献するところが大きかった。

22、昭和四十八年（一九七三）十二月十六日

京都産婦人科医会二十五周年記念資料展

京都産婦人科医会創立二十五周年記念式典を、京都ホテルで行い、併せて産科領域の資料展を催した。

23、昭和四十九年（一九七四）三月二十日

『京都府立医科大学百年史』発行

創立百周年記念式典が、昭和四十七年十一月三日に行われた。

五、昭和五十年―平成三年（一九七五―九一）

1、昭和五十年（一九七五）四月四―八日

京都の医学史展

会場 京都府立総合資料館

第一九回日本医学会総会（会頭 平沢 興）が四月六―八日、京都市で開催された。この年、日本医史学会総会は大阪市（会長 中野 操）で行われた。京都府医師会は医学会総会に協力する意味で、京都府立総合資料館と共催して京都の医学史展を開催した。守屋正委員長のもとに精力的に活動して、仁和寺所蔵の国宝医書をはじめ、京都の医学史に関する三二六

点の資料を集めて展示した。これは昭和三十年、京博で行って以来の本格的医史展であり、多くの参観者をえるとともに、その後の京都府医師会を中心とした医史学研究の出発点となった。出品物写真及び解説を附した図録を発行した。

2、昭和五十一年（一九七六）三月七日

山脇東洋覬臓碑建立記念行事

日本医師会、日本医史学会、日本解剖学会、京都府医師会が発起団体となって、山脇東洋顕彰会を組織して覬臓記念碑を建立し、記念行事を行った。

(一)覬臓記念碑除幕、山脇東洋が始めて覬臓を行った京都感化保護院前庭に、記念碑を建立し、三月七日除幕式を行った。

(二)記念式典・記念講演は同日、京都府医師会館講堂で行った。講演として

六角獄制について 熊谷康次郎

山脇東洋のあとさき 小川鼎三

(三)誓願寺山脇家墓地の整備

(四)記念誌『覬臓碑建立記念 山脇東洋』を昭和五十一年五月十八日に発行した。

なおこの後、例年三月七日に府医師会編纂室員は覬臓碑及誓願寺墓地に献花をするのを例としている。平成二〜三年、感化保護院が全面新築されたのに伴って、覬臓碑も若干移動された。

3、昭和五十二年（一九七七）九月二十五日

賀川玄悦没後二百年記念行事

賀川玄悦没後二百年祭に当り、近畿産婦人科学会、京都産婦人科医会が主催して、日本医師会、日本医史学会、日本産科婦人科学会、京都府医師会、徳島県医師会の協賛を得て顕彰会（会長 山田一夫・準備委員長 杉立義一）を組織し、各界の

浄財をあつめて、記念事業を行った。

(一) 顕彰碑除幕、賀川家菩提寺である玉樹寺（京都市下京区中堂寺西寺町一七）の本堂前庭に顕彰碑を建立し、九月二十五日、法要と除幕式を行った。

(二) 記念式典、講演会、同日午後、祇園中村楼において記念式典を行い、記念講演が行われた。

阿波賀川家の後継者たち 九嶋勝司

賀川玄悦の偉業 小川鼎三

(三) 展示会、同時に別室において賀川玄悦及賀川流産科に関する資料展を開いた。

(四) 記念誌『没後二百年記念 賀川玄悦』を編集し、昭和五十三年九月に発行した。

4、昭和五十三年（一九七八）六月四日

産論句碑建立

玄悦の記念事業を伝え聞いた水原秋桜子は、『産論の月光雲をはらひけり』という句を作って寄せた。そこで京都産婦人科医会有志は、玉樹寺の記念碑の真向いに句碑を建て、除幕した。

5、昭和五十四年（一九七九）四月十四日

二十六聖人発祥之地記念碑建立

長崎の西坂公園に祀られている二十六聖人は、下京区四条堀川の西南角にキリスト教病院を開いて医療活動を行っていたが、慶長二年捕えられて長崎に送られて、即日処刑された。この事を知る人は少い。それを顕彰するためカトリック京都教会と京都府医師会有志がはかり、綾小路通岩上通角に石柱を建て、ここより百メートル東にある四条外科病院の入口横壁面に顕彰板を設置し、四月十四日除幕した。

6、昭和五十五年（一九八〇）三月二十五日

京都の医学史（本文篇、一四三二頁）刊行

同年八月二十日

京都の医学史（資料篇、五五二頁）刊行

京都の医学史に関しては個々の研究業績は多くあったが、系統的通史は未だなかった。そこで京都府医師会は、昭和五十二年十月に医学史編纂室を設け、宗田一を顧問に迎え、医師会員一名による分担執筆にとりかかり、三年の歳月を経て思文閣出版より発行することができた。

執筆者、宗田一、阿知波五郎、指宿照久、杉立義一、高島文一、竹澤徳敬、中野進、藤垣亀雄、藤田俊夫、守屋正、山田重正、横村庄一郎。

なお本書は、昭和五十五年、第三四回毎日出版文化賞特別賞に輝いた。

7、昭和五十五年四月六―二十七日

「京都の医学史」刊行記念、京都の医の文化史展

会場 思文閣美術館

京都の医学史に引用した資料約二百点を展示した。期間中、次の講演会及びシンポジウムを行った。

記念講演 四月十三日

京都の祭りと医療思想 宗田 一

医学史と京都 吉田光邦

シンポジウム 四月十九日

京都の医史の特色―京都の医学史の編纂を終えて 山田重正、竹沢徳敬、杉立義一

8、昭和五十五年十月一日

京都府医師会医学史資料室を創設

医学史編纂室を改組して医学史資料室を創設した。

9、昭和五十五年十月二十二日

京都医学史研究会創立

京都府医師会員の間にも、医学史に関する関心が高まってきた。そこで志を同じくする者が集まって研究会を創立した。入会者七十名、事務所は医師会館内におく。毎月第一木曜午後二時より研究会をひらくこと等を決めた。

記念講演

医学史研究の現状

宗田 一

10、昭和五十七年（一九八二）六月五―六日

第八三回日本医学史学会総会

会場 京都府医師会館

会長 守屋 正、準備委員長 杉立義一

特別講演

祭祀の医療思想

宗田 一

京都の医学の源流

山田重正

会長講演 江戸時代の京都における医の倫理の史的考察

守屋 正

一般口演 六二題

展示会 京都在住会員所蔵の基本的医学史料六四点を展示した。

史跡見学 六月六日午後一時、医師会館出発。

玉樹寺（賀川家墓地、記念碑、句碑）—誓願寺（山脇東洋墓地、山脇社中解剖供養碑）—奥溪家（御殿医下屋敷）—孤篷庵（小石家墓地）—真珠庵（半井家墓地） 参加一五〇人

11、昭和五十九年（一九八四）八月

究理堂文庫資料展

究理堂文庫（小石家）では、所蔵資料のうち四三点を撰んで展示公開した。

12、昭和五十九年（一九八四）十月十日

医心方撰進一千年記念行事

昭和五十九年は永観二年（九八四）より数えて一千周年に当る。日本医史学会、日本東洋医学会が主催団体となって医心方一千年記念会（会長 小川鼎三）を組織し、日本医師会他数団体の後援を得て、全国から浄財を募って記念事業を行った。（一）医心方一千年記念碑建立、御寺泉涌寺山内、今熊野観音寺境内の医聖堂の側園に記念碑を建立した。十月十日、医聖堂落慶式にひきつづいて、記念碑の除幕式を行った。

（二）記念式典、同日午後、思文閣美術館において式典と記念講演を行った。

（三）記念講演

日本医学のあゆみ

宗田 一

江戸医学における医心方の影写と校刻事業の経緯

矢数道明

中国古代医学と医心方

三迫初男

医心方中的古医学文献初探

馬 継興

（四）日本の医学一千年展、思文閣美術館において、十月六日から二十一日まで、医心方関連資料を中心とした五〇点を展示した。

(五)医心方研究会、昭和六十年十月六日、医聖堂講堂において、東西の各分野の医心方研究家が集まり、一三題の研究発表を行った。

(六)記念誌『撰進一千年記念 医心方』を編集して、昭和六十一年三月十日発行した。

13、昭和六十年（一九八五）十月十日

医聖堂に医家先哲祭祀

医道顕彰会（会長 平沢 興）は、わが国の医学の発達及び医道亢揚につとめた医家先哲一二二名（明治前）を撰定して、医聖堂に祭祀し、石碑にその氏名を刻んだ。

14、平成二年（一九九〇）十一月三日

初代曲直瀬道三顕彰碑除幕

日本東洋医学会、日本医史学会、東亜医学協会の共催で、菩提寺である十念寺（上京区寺町通今出川上ル）の本堂横に、顕彰碑を建立し十一月三日、除幕した。

15、平成三年（一九九一）四月三十七日

第二三回日本医学会総会医学史展示

会場 京都文化博物館

第二三回日本医学会総会（会頭 岡本道雄）が四月五―七日、京都市で開催された。その医学史展示は、人・愛・技をテーマとして、資料、写真パネル二五〇点を次の四部門にわけて展示した（委員長 中川米造、委員 杉立義一、中橋弥光他）。

パート一、日本の医学の転換史を訪ねて

パート二、現代医学と医療の転換期を迎えて

パート三、医の倫理や人間性の回復に関して（ウイリアム・オスラー、アムプロアズ・バレー）

パート四、京都地域医療の歴史

16、平成三年六月一・二日

第九二回日本医史学会総会

会場 京都府医師会館

会長 杉立義一、副会長 藤垣亀雄、準備委員長 中橋弥光

教育講演 一隅を照す。医学の輝き

山中太木

特別講演 中国医学における経絡経穴の変遷

高島文一

会長講演 医心方の伝来から見た日本医学史の一側面

杉立義一

会員口演 五八題

史料展示 医師会館四階

1 京都における医学史研究史、資料一二〇点

2 医学史料特別展示（会員所蔵未公開史料）

史跡見学 六月三日

鳥津記念資料館―十念寺（曲直瀬道三墓地、顕彰碑）―今熊野観音寺（医聖堂、医心方二千年記念碑）―泉涌寺（靈明殿、月輪

御陵）―真宗院（山脇家正墓）―御香宮（小堀遠洲庭園）―伏見刑場跡（平次郎解剖）

市民公開講演

仏教大学四条センターにおいて、四月より六月の間、次の講演と写真展を行った。

近代外科の父、アンブロアズⅡパレ 大村敏郎

近世京都の医人たち

末中哲夫

西洋医学採用の事情

宗田 一

療病院の設立と京の寺院の協力

藤田俊夫

町医者八代

小石秀夫

京の医療信仰と医療史

奥沢康正

写真展、京の医史跡

杉立義一

17、昭和五十五年（一九八〇）十月〜平成三年（一九九一）九月

京都医学史研究会の事績

創立以来、例会一〇九回開催した。このうち春秋（三・十月）二回は京都府医師会と共催による医学史講演会である。機関誌『啓迪』は、昭和五十八年以来、毎年一回宛九回発行した。

六、むすび

慶長二年（一五九七）から今回に至るまで、四百年間にわたる京都において行われた医史学的研究の概要を記した。もとより私の狭い視野に入った範囲であり、さらに個々の著作は割愛したことを断らねばならない。

ここに列記した六九の事項は、夫々が単独の点として偶々発生したのではなく、京都という歴史的、文化的環境にあって、時機を得て出来したものと考えている。

この間、明治維新、第二次大戦の前後には、医学研究の空白期があったことも止むを得ない。維新後、医学に目を注ぐまでには二十数年を要した。京都においては、竹岡友仙、佐伯理一郎、半井朴、藤浪鑑ら京都在住の研究者に加えて、富士川游、呉秀三ら近代医史学者の影響を見のがすことはできない。

また第二次大戦によって十年近い中断があったが、関西においては、中野操、三木栄、阿知波五郎らを中心にして、比

較的早期から医史学研究が再開された。

京都において、昭和三十年代には江戸時代の古方家、蘭学者の年忌に際して、顕彰事業や業績の再評価が度々行われた。山本四郎による一連の京都蘭学者の研究は特筆すべきである。また昭和四十年代における太田典礼による京都における医史学研究に対する側面的援助も大きな力となった。

昭和五十年に開催した京都の医学史展を契機として、京都府医師会、京都医学史研究会を中心とした医史学研究は一層活発となった。それを牽引したのは、阿知波五郎、山田重正、守屋正、宗田一らであった。その伝統の上に立って、昭和五十七年と平成三年と、二度にわたり日本医史学会総会を、京都で開催することができた。

ここで改めて、京都における医史学研究上の特色について考える。

京都市全域が歴史的風土におおわれており、多くの医学史跡が随所に残っている。

京都大学、府立医科大学をはじめ市内の各大学、博物館、資料館、研究所には貴重な資料が多く保存されているとともに、歴史学者も多く、専門的知識を得やすい。京都市内及び近隣には医家旧家が多い。例えば親康家（丹波康頼より四十年代）、北小路家（安芸守定より二十一代）、をはじめ、小石家、伊良子家、中神家、竹岡家、百々家等々あり、夫々古文書、書籍、史料を伝え、かつ現在も医業を継承しているという現実は、われわれに指標と助言を与えるものである。また近年、会員の中にも、積極的に医学資料を蒐集する動き（和田医学資料館、昭和六十三年開館）もある。

このような恵まれた環境にあって、私共の今後の研究目標はどこに焦点をおくべきかを考えてみる。

『京都の医学史』は発行後、既に一一年を経たが、本文中に補訂せねばならぬ個所が相当数見出されてきた。また同書は明治三十三年（一九〇〇）の京都大学創立の翌年をもって終りとしているが、それ以来一世紀近い年月が流れた。当然の事ながら、折をみて続篇を執筆せねばならない。

京都では平安から明治までの歴史が長いから、医史学の研究対象をつい明治以前に求めることが多い。機関誌『啓迪』

一号より九号までの掲載論文をみて、明治前三一題に対し、明治以後は八題にすぎない。明治以後の京都における現代医学の発達過程、さらに社会の変化に伴って発生した諸々の医療問題の変遷も医史学的に追跡せねばならない。近年、京都工場保健会が『労働衛生四十年』を発行したことは意義深い。

最後に広い視野に立って医史学研究を顧ると、最近の医療の進歩により、旧来の倫理感では解決できない事態が増加してきた。それは単に尖端的医療に関する範囲だけでなく、日常の医療に於ても困難な問題に、遭遇する事がある。また社会一般の医療を見つめる目にはきびしさを加えてきた。このような諸問題を解決するうえで、医史学の占める役割は大きいと言わねばならない。

(おわり)

文 献

- (一) 『医譚』復刊第一号、昭和二十七年十二月。
- (二) 『日本医史学雑誌』復刊第一号(五卷一号、通卷一三三五号)、昭和二十九年三月。
- (三) 『日本医史学雑誌』清涼寺釈迦像胎内五蔵研究特集号、七卷一—三号、昭和三十一年九月。
- (四) 『第十四回日本医学会総会誌』昭和三十一年十二月。
- (五) 『日本医史学雑誌』五卷四号、第57回日本医史学会総会講演要旨、昭和三十年四月。
- (六) 『医学に関する古美術聚英』便利堂、昭和三十年九月。
- (七) 『京都府立医科大学八十年史』昭和三十年八月。
- (八) 『藤林普山記念誌』昭和三十二年十月。
- (九) 『医譚』復刊十九号、特集小石元俊略伝、昭和三十三年十一月。
- (一〇) 『日本医史学雑誌』九卷三—四号、第61・62回日本医史学会総会講演要旨、昭和三十七年三月。
- (一一) 『復刻版』蘭学資料研究 附巻『龍溪書舎』昭和六十二年四月。
- (一二) 中野 操「山陽東洋二〇〇年忌によせて」『京都医報』二八八—二九一号、昭和三十七年四月一・十一・二十一・五月一日。
- (一三) 西村秀雄・雨宮次生「山陽東洋観臓の地の今昔」『日本医事新報』一九八四号、昭和三十七年五月。

- (一四) 『医譚』復刊二五号、山脇東洋二〇〇年忌記念特集、昭和三十七年七月。
- (一五) 山本四郎『新宮涼庭伝』ミネルヴァ書房、昭和四十三年。
- (一六) 杉立義一「水原三折とその業績」『医学選粹』一七号、日本医学文化保存会、昭和五十四年八月。
- (一七) 中神良太『先哲琴溪中神等、墓前法要記念特輯号』昭和四十年三月。
- (一八) 『京都大学七十年』昭和四十二年十一月。
- (一九) 『京都府医師会二十年史』京都府医師会、昭和四十三年九月。
- (二〇) 『古医学月報』一号、古医学資料センター、昭和四十八年十月。
- (二一) 三木通三『京都産婦人科医界沿革史』京都産婦人科医会、昭和五十八年十月。
- (二二) 『京都府立医科大学百年史』昭和四十九年三月。
- (二三) 『京都の医学史展』京都府医師会、昭和五十年四月。
- (二四) 『観臓碑建立記念 山脇東洋』山脇東洋顕彰会、昭和五十一年五月。
- (二五) 『没後二百年記念 賀川玄悦』賀川玄悦顕彰会、昭和五十三年九月。
- (二六) 賀川玄悦顕彰記念『産論・産論翼・読産論』出版科学研究所、昭和五十二年九月。
- (二七) 中尾 宏『京都の渡来文化』淡交社、平成二年一月。
- (二八) 『京都の医の文化史展目録』思文閣美術館、昭和五十五年四月。
- (二九) 『日本医史学雑誌』二八巻二号、第83回日本医史学会総会抄録、昭和五十七年四月。
- (三〇) 小石秀夫『究理堂の資料と解説』究理堂文庫、昭和五十三年十二月。
- (三一) 『日本医史学雑誌』三一巻三号、昭和六十年七月。
- (三二) 『撰進一千年記念 医心方』医心方一千年記念会、昭和六十一年三月。
- (三三) 『漢方の臨床』三七巻一二号、東亜医学協会、平成二年十二月。
- (三四) 『日本医史学雑誌』三七巻二号、平成三年四月。
- (三五) 『啓迪』一一九号、京都医学史研究会、昭和五十八年五月—平成三年四月。
- (三六) 『労働衛生四十年』京都工場保健会、昭和五十八年七月。

(京都市…京都医史学研究所)

Progress of the study of medical history in Kyoto 〔II〕

by Yoshikazu SUGITATSU

The outline of medical history studied in Kyoto for approximate four hundred years, from 1600 to the present was reviewed.

Except for the times around the Meiji Restoration and World War II, the study of medical history has been continuously conducted.

The historical and cultural circumstances in Kyoto have provided many advantages for the study of medical history.

We discuss where the goals of the study in future are to be set. First, we will publish a complement and a sequel to the book “Medical History in Kyoto” issued in 1980. Second, it is necessary to study the history of the recent years’ developments in medicine, since Meiji era. And further, we have to study the problems in ethics caused by the rapid progress of modern medicine.